

# 「一口」の満足のためにできること

〈北海道〉上野 由利子 55歳

私が看護教員として実習指導していた時、出会ったAさん。Aさんは食道がんの治療のために、5カ月間絶飲食を続けていた。がんは肺にも転移し、せきや痛みなどの症状を抑えるためにモルヒネを使いながら生活していた。

やっと水分とゼリーの経口摂取の許可が出て、昨日最初の一口を飲んだという情報から、私はさぞおもしろいだろうと思い、「昨日の水の味は、どうでしたか」と尋ねてみた。意外なことに「飲みたくない時に先生から『飲んでみて』と言われて飲んでみても」という返事であった。そうだった。飲みたい、食べたいという当たり前の欲求は、欲する時に欲するものを口にするのでなければ

満たされない。それならば、今日は何としても、満足できる一口をAさんに摂ってほしい。

学生との話し合いの結果、Aさんが好むものをAさん自身を選んでもらう、身綺麗にすることを好むAさんに洗髪と足浴をして、さっぱりしたところで水分とゼリーを摂ってもらおう、それにはモルヒネが効いて落ち着いている午後がいい、と決めた。さっそくAさんにその計画を提案し、承諾していただいた。ベッドに横たわる時間が長いAさんに、何とか笑顔を取り戻してほしかった。Aさんが売店で選んだのは、イチゴ味の乳酸飲料だった。洗髪と足浴で「女王様になったみたい」と言っていた後、いよいよ今日の「

一口。初めて見るAさんの満面の笑顔。指導者である看護師が「どうですか。今日の一口は」と問うと、Aさんはあの北島康介選手の名台詞を口にした。

「何も言えねえ」

周りの学生も指導者も思わず笑った。その笑い声が部屋から漏れて、キラキラ光っていた。表情をなくしたAさんの心が溶けて、今、満たされているようだった。温かく柔らかな時間が過ぎた。

卒業前の最後の実習で、学生たちの成長した姿をうれしく思い、看護教員として、かけがえのない、ありがたい時間となった。そしてAさんには、「一口」の重みを教えていただいた。